C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf園長だより　平成３１年２月号（20190222）

園長　平澤　正則

いたずらについて考える

　最近，いたずらがテレビや新聞で取り上げられています。アルバイト店員が食品などに不衛生な行為をする動画などを仲間が撮影しネット上に投稿した事件をはじめ，様々ないたずらが巷を賑わしています。「いたずらのニュース」でネット検索したら，あるわあるわ，あとからあとからというくらいにでてきました。どれもこれも「いたずら」では済まないだろうとだれもが思うような酷いレベルで，多くの人はそれを犯罪と呼ぶのではないかと思います。

　いたずらとは，「面白半分に他人を驚かせるための行為」であったり，「相手に大きな損害を与えない程度の悪ふざけ」などだと思います。面白半分であったり大きな損害を与えない程度だと本人が思っていても，結果としてニュースのような多大な迷惑がかかる行為が多発している現実はとても面白いなどといってはいられない状態です。善悪など分かっているのに自分や仲間の楽しみや欲望を優先させる行為をいたずらと考えているのか。それとも本当にあと先を考えていなかったのか。驚くばかりです。

　さて，自分を振り返ってみますと，私だっていたずらをしましたが記憶に残っているのは二つ。，一つは，お寺の竹やぶに石を投げ，カンカンと響く音に気付いて住職があわてて追いかけてくるのをみて喜ぶというもの。当時小学校入学前の私は家の中まで追いかけられ捕まりそうになったのを覚えています。別に楽しいと思ってやった記憶はないのですが，上級生たちと一緒に悪さをするスリルを味わっていたとは思います。両親は平謝りだったそうです。もう一つは，中学校の帰りに，道端の畑に成っていたトマトを友だちと一つずつもぎって食べた記憶です。これはだれにも見つかりませんでしたが，一度しかやりませんでした。さすがに続ける図々しさは持ち合せていませんでした。しかし，やったのは事実です。

この歳になった今となっては他人が嫌がることをわざわざやろうとは思わないのですが，やはり若さというのはその誘惑に時として負けるということでしょうか。しかし，その時々に自分の中で反省したり，仲間の中で指摘し合ったり，誰かに叱られたり，あるいは行為の結果に驚きおののくなどしながら，「程度」という基準が備わっていくのだろうと思います。そのチャンスは唯一，人との交わりの中で生まれると思います。他人との交わりが希薄になるとその痛みにも気付かぬものです。今ニュースになっている若者たちは様々な立場の人との交わりの経験が少ない人たちであろうと私は思います。人を愉快にさせるいたずらと不快にさせるいたずらの区別や程度の違いに気付かずに，あるいは善悪に気付いていても己の満足を優先してしまった結果が引き起こす様々な人の痛みを想像できずに成人してしまった人たちなのだろうと感じます。

　今目の前にいる幼い子どもたちには，いたずらを重ねながらも同時に他人の痛みにも気付いていける少年・成人へと成長してほしいなと思っています。